



学園ニュース

世界ジュニア陸上競技選手権大会 トレーナー活動報告

鍼灸学科28期夜間部 松下美穂

7月7日～21日まで、イタリア・グロッセートで行われた世界ジュニア陸上競技選手権大会に、日本代表選手団トレーナーとして帯同しましたので、その活動内容を報告させていただきます。

この大会は2年に1度実施される、15歳から19歳までの世界大会で、日本選手団は男子20名・女子16名の計36名でした。メディカルスタッフはドクター1名、トレーナー2名でした。イタリア・グロッセートはローマから車で北へ2時間半ほどのところに位置しています。地中海性気候であり、日中は30度近くまで気温があがりますが、湿度が低く、とても過ごしやすい環境でした。グロッセート郊外にあるホテルが選手村となり、そこを拠点に活動しました。

帯同トレーナーの仕事は出発前から始まります。選手が選考されたらすぐに選手にコンディショニングチェック表を送信し、体調やけがの状態の把握、普段から使用している薬やサプリメントの確認を行います。特にドーピングコントロールが行われるため、選手の使用している薬については非常に気を遣うところです。



選手村に入ってから仕事は朝6時から夜の治療終了の12時頃まで。選手村の部屋(今回は私の部屋でした)をトレーナールームとして設置し、試合前後のコンディショニングやけがの治療を行います。また、練習時や試合時には競技場に帯同し、ストレッチ・テーピング、コンディショニングなどを行います。特に、試合前のコンディショニングでは、選手がベストパフォーマンスを発揮できるよう、選手とコミュニケーションを取りながら行っています。けがをしている選手に対しては、ただ単に治療を行うだけでなく、今後のけがに対する対処法についてもアドバイスします。

さらに、時差対策や選手村内の食事の取り方のアドバイスなど、ジュニアの大会ならではの仕事もあります。特に今回の選手村内の食事ではほとんどの料理にオリーブオイルが大量にかかっているため、下痢をしてしまう選手も多く、日本から日本食(ごはんやみそ汁)を持参している選手も多くいました。

トレーナー活動での鍼灸治療については、非常に有効な手段であると考えられます。日頃、コンディショニングやけがのケアに鍼灸治療を受けている選手は多くいます。ただ、試合直前に筋肉に鍼治療を受けることに抵抗がある選手も少なくありません。今回の遠征ではコンディショニングよりもけがのケアを中心に鍼治療を行いました。海外で行われる大会は日本でされる大会との違いも多く、そのような中でいかに良い環境を作るかも大切であると考えています。

今大会は、過去最高の成績をおさめることができました。最後のリレーでも銅メダルを獲得するなど、選手から多くの感動を与えてもらいました。今大会に参加した選手の多くが、4年後の北京オリンピックに出場してほしいと願っています。

今回、日本代表チームのトレーナーという活動ができたことを幸に思います。



“模擬患者参加によるコミュニケーション学習”を見学して

鍼灸学科24期夜間部 池田 明博

開業して間もない頃、ある患者さんに問診不行き届きのため随分迷惑を掛けてしまった。その方は腰痛を訴えて来院されたのだが、最初から腰以外を疑うことをせず、肝心なポイント、つまり腰以外の原因もあるということをしつかり見逃してしまっていた。途中心因性の腰痛であることに気づき、治療方針を変え何とか治癒したものの、余計な心配と日にちをかけてしまった。お陰様でコミュニケーションの大切さとその治療効果への影響を理解させていただき貴重な経験を得たのですが。

コミュニケーションの大切さが分かっている、それをうまく治療に活かすのはなかなか難しいものではないでしょうか。気付けば、自分の興味ある話題を一方的に患者さんに話しているということもあります。私達

の仕事は相手の症状の更に奥にある本当の原因をつきとめ、その部分をも含めた治療をしていかなければならない時もあります。それには患者さんと私達術者が同じ目線に立ち、一方的でなく対話という形のコミュニケーションがなされなければならないでしょう。

この度、機会があり母校である森ノ宮医療学園の鍼灸学科2年生のサマースクールの一つ“模擬患者参加によるコミュニケーション学習”に参加させていただきました。そこではまずコミュニケーションスキルの基本が事細かに説明され、学生同志が患者と術者のそれぞれのシナリオを持ち、ロールプレイ方式でシミュレーションを行うという、実際の医療現場に近い状態での授業が行われていました。